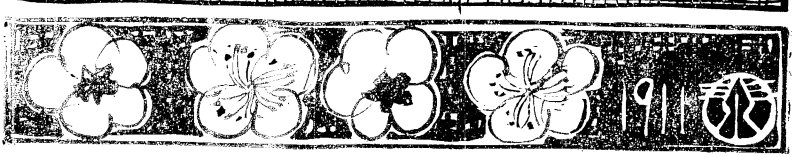
# 中學世界

第拾四卷第貳號

四十四年二月一日發行



# 偉人崇拜と青年

文學博士　桑木嚴翼

## 一　青年は清新の氣象の權化

言葉には、其本來の意味以外に、種々の關聯した觀念が附隨して居る。而して、其の觀念聯合の方法は、時勢や社會等によつて種々變化して行くから、其の變遷の跡を辿ると、中々興味ある事實を發見することが出來る。青年といふ言葉も其一で、其本來の意味は、言ふまでもなく若い人といふことだらうが、少し昔しは、青年とか青年會とかいへば、主として基督敎徒や其團體を聯想したものだ。現に青年會館といふのがある。各學校にも基督敎青年會などいふ組合がある。然し、青年會の頭に基督敎といふ形容詞を附けるやうになつたのは、既に其の意味が變更しかけたことを示すので即ち之に對する佛敎青年會の一方に起つて來た事實を告げて居る。實際基督敎徒の社會事業を模倣（と云つては語弊があるか知らないが、とにかく之に刺戟されて）して、諸種の事業を計畫した佛敎徒の中からも、また同じ名のつく青年會が出來るやうになつた。其後、青年といふ語には宗敎的聯想がなくなると共に、凡て一般に學校で學ぶ若い人を指すことになつた樣だ。商店其他の若者を青年と言へぬとはないが、まづ青年と云へば、一般には學生を指す樣に思はれた。處が、此青年を老人と比較對照すると共に、一種の響を有する「若い人」といふ言葉と同意義になり、青年とはつ

まり老人に反抗する者、老人の察し得られない深い思に苦しむ者といふやうな意味になつて來て、丁度ツルゲネーフの小説其他にある「父と子」の「子」といふ語と同じやうになつて來た。處が、近來では、何時となく此語に場所の上の制限が出て來て、言換れば地方的區別が出來て、青年といへば主として田舍の農村の若者の意義となり、青年會とか青年團とかいふと、其等義務教育修了者の仲間を指すやうになつて來た。即ち少し前には、青年は寧ろ青年學生の意味で、都會で遊學する人、若しくは心だけでも都會の學生と同一になつて居る山間僻地の「若い人」を意味して居たが、今では其ついて別に何等評價を試みやうとも思はないが、此雜誌が『中學世界』と名づけられて居て、主として學生若しくは好學の青年に讀まれる以上、余の所謂「青年」には自から其に適しない意味を含んでは居らぬ筈である。

桑木博士

と正反對に、寧ろ學問とか都會とかいふことに成るべく緣の遠い「若者」を指すやうになつた。

余は此變遷に

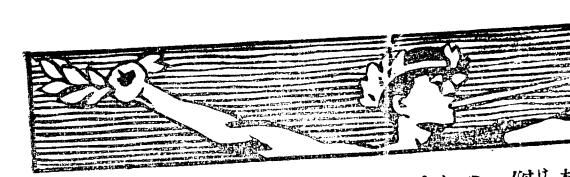
此の如く青年とは其本來の意味通り若い人である。「若い」といふことには「新しい」といふ意義が必然的に附隨して居る。一口に言へば、青年は清新の氣象の權化[illegible]

ふとと、一緒に停滯するといふととは兩立することが出來ない。即ち清新には進歩活動が必要にして缺くべからざる方法過程である。社會は複雜であるから、決して一理を以て律することは出來ず、從て進歩の側面には保守も必要であらうが、然し、青年の特色は其本質たる清新、進歩等に存する。余は屢〻此事に就て論じたことがあるから、今はたゞ此假定を立てゝ置いて論を進めたいと思ふ。即ち此青年に對して、近頃偉人崇拜を皷吹する傾向が多いのは如何なる意味を有するか、此點に關して批評的研究を試みて見たいのである。

## 二　偉人崇拜は目的でなく手段

偉人とか英雄とかいふものゝ社會に必要なことは言を俟たない。英雄時勢を造るか、時勢英雄を產むか、此の如きことに關して今更論議を費す必要もない。假りに後說を執り、英雄は全く時代の代表者に過ぎないとした處で、其代表を何人もすることが出來ぬ上は、やはり英雄に衆俗以上の力量を認容しなければならぬ。一世を擧げて滔々として皆凡俗ばかり、ドングリの背競べであつたならば世の中の變動も改革も何も出來はしない。苟且偷安、空しく父祖の遺業を繼ぐといふことに止まるから、前に述べた意味の青年が、此種の偉人英雄を歎美するのは惡くないのみならず、當然の事といはねばならない。所謂世故に長けた老人株になると、往々にして事業の改革などを煩はしがり、又多くの場合改革が失敗に終ることなどを知り過ぎて居るため、思ひ切つた華やかな英雄的事業よりも寧ろ質實な常識的平凡主義を皷吹することが多いから、清新な青年が之に反して偉人の鴻業に眼が眩む許りになるのは頗る當然の事である。寧ろ奬勵すべきことゝ思ふ。處で、偉人の大業に對しては

之を歎美するが、何人もさう容易に偉人になれるものではないから、普通一般には先づ其事蹟を知悉し、其人物を敬慕し、終に其を崇拜するに至るのは當然の順序である。其故に、偉人崇拜は決して青年に不似合なものとも思はれないが、然し一歩進めて考へて見れば、成人者に於てこそ、愈〻自分の實力を確かめて見たので、偉人になれないとか何とかいふ實際的な、世帶染みた、平凡な考へを起す譯であるが、青年は本來皆成人者の卵であるから、青年自身は皆な此先きどんな偉人になるかも分らぬといふ有望な境遇にある身分なので、早くから諦めをつける必要はない。從つて、崇拜必しも惡くもないが、然し之を到底企及すべからざるものとして、外部へ別置するのは如何はしいと思はれる。もし偉人を理想とするなら、自分の最も同情し得べき、從つて最も傾向を同くして自分と緣のありさうな偉人を選擇すべき筈である。之を神の如く崇拜するのは、實行上効果が少ないのみならず、自ら好んで己を卑くする所以に過ぎない。偉人崇拜は手段であつて、目的となつてはならない筈である。然るに、今日の偉人崇拜は幾分か目的となつて居る傾がないでもない。必しも偉人崇拜其自身が人生終極の目的だといふ譯でもないが、偉人崇拜を經過して自から其偉人となるといふ志を起させるに至らない形跡がないではない。偉人崇拜を手段とする場合は青年の意氣が豪壯であるが、之を目的とする場合は青年が老人と同じく偉人に歸依渴仰することとなつて、追懷敬慕の情にのみ打たれるから、自ら事を始める志を失つて仕舞ふ。且つ最も妙なのは、偉人を說くことは、元來多數の老人に取つては、凡俗たる自分等の恥を曝すやうなものだから、青年側から偉人を例にして、現今の社會の其理想通りになつて居ないのを攻擊する場合に、老人連は寧ろ之を抑壓して着實な處世法でも說くべき筈だのに、老人の方が先頭に立つて偉人崇拜の精神を振興させや



# 今の所謂偉人の性質内容

今の所謂偉人崇拜の動機如何

問題が二つある。今の所謂偉人とは如何なる性質を有するものか。

我々は此問題を常に青年と交渉する點から考察したい。

偉人といふ言葉も隨分多義である。本來の意義は『豪い人』といふことに過ぎまいが、其に伴ふ聯想は初に述べた青年と云ふ語の通り千差萬別である。科學上の大發見をしたとか、文學藝術上の傑作を出したとかいふ人は確しかに豪い人である。さほどの發見も創作もなくとも、學殖が尋常人の倫を逸して居るとか、識見高邁で明晰な判斷を下し得る人なども、一種の豪い人たるを失はぬ。宗教上の革新を斷行したり、或は改革等の業を敢てしないが、敬虔信仰の念に篤い人や、教を一世に垂れて萬人の儀表となつた人や、或は其樣に廣い勢力を及ぼさないでも、其鄕黨の間に絶大な感化を及ぼした人などは、皆何れも豪い人と稱して差支はない。人々の考方や、希望や、或は社會一般の精神などがちがふに從つて、此見方がそれ〴〵異なつて行くのだが、若其理想とする偉人が恰かも各人に相當したものであれば、よしや自分が其偉人となると考へないまでも、其關係は餘程親密になつて行くべき筈である。嘗て東京と京都との花見に就て、こんな感想を惹起したことがある向島や上野あたりでは所謂長堤十里の花とか、花の隧道とかいふ有樣で、花見の群は其中を通る時に、自から顏に櫻色が出るのみでなく、心まで眞に花と融合して仕舞ふやうになる。處が、高い山の雲か霞のやうに見える花になると、たゞ遠くから餘所にのみ見てやみなんといふばかりである。

有名な祇園の夜櫻の如きも、一本の櫻――其れは多少枝振もよからうが――を四方に陣取つて翫賞するのであるから、花と我とは永久に離絶して居て、花につれられて狂態を演ずるといふやうになりさうもない。其れ〴〵に特色があるから、一方の同化的花見を以て他方の賞翫的花見を貶する譯には行かぬが、一寸こんな差別がある樣に思はれた。今偉人崇拜に對しても、其と同化しない程度のと否との別があると思ふ。老人から青年に對して偉人崇拜を鼓吹する場合には、往々にして其偉人が青年の日常の理想と沒交渉なものがあり得る。さうなると崇拜は永久崇拜に止まつて、實行の動機にはならない。其れで、問題は其偉人といふ語に就て、我々が直ちに聯想する意味如何といふことに歸する。

既に述べたやうに、偉人といふ語は凡て何事か傑出した人を表すべき筈だが、其傑出と見る所以が人々によつて異なる。今日我々が偉人といふ語から直ちに聯想する意味は、決して學術界や文藝界や或は宗教界等の偉人を指すのではない。其等に對しては通常天才といふ語を以て之を表する。カーライルの英雄、エマソンの代表的人物の中には、宗教家も居れば詩人も居るが、是等も既に今日多くの人が偉人と稱する者ではない。然し宗教の開祖とか大改革者とか、乃至大詩人大學者などは或は偉人と稱せられるか知らないが、平靜な生涯を送る君子を偉人と稱することは極めて稀だ。一言にすれば、偉人とは社會の表面に赫々の功名を顯した人々を推すやうである。從つて其中に算へられるものは、先づ政治軍事或は產業等の如き社會の活動的實際的方面で、眞正の意味の成功を遂げた人に限られて居る。時としては思想界とか精神界とかいふ方面に屬する人も列擧される場合があつても、やはり其人が社會の實際界に對して、幾許かの効果を顯して居るからであつて、決して

單に思想界等の人としての價値を認められた譯ではない。例へば、孔子とか釋迦を偉人の中に算するとは決して誤謬ではないが、もし是等を秀吉とか、ワシントンとか、ナポレオンとかいふ人々と一緒に並列したら、之によつて思想界の價値を正當に理會して居ることを證明すると言はれやうか。もし孔子や釋迦基督を算へて、ニュートンとかアリストテレスとかゲーテとかいふやうな人々を算へなければ、我々は其偉人の標準は全く社會の實際的方面にあつて、孔子等も幸に其敎が實際界の勢力となつたから、其中に認められたのに過ぎないと思はねばならぬ。要するに、所謂偉人は功名を竹帛に垂れる底の偉人である。社會を其のあるが儘に受取つて、其中で目覺しい働を仕遂げる人人である。現在の社會に對して根柢から批評を試み、暫くも已まない進歩活動の精神に驅られる思想界精神界の天才の謂ではない。言を換へれば、社會の維持を圖る老成者流の理想に適ふ者であつて、社會の發達を考へる青年者流の精神とは風馬牛である。

## 四　偉人崇拜を唱道する人々の動機

此の如き偉人の本質は、其崇拜を唱道する人々の動機によつて察しられる。蓋し西洋近世の初に當つて、種々思想上の變動が起つた際、其の何れにも共通な精神は自由と自覺といふことであつた羅馬敎會の宗敎々義と希臘哲人の定說と、桎梏中にあつた中世の思想界は、近世に至つて全く面目を一新した。昔しは、人々は神と古人との間に埋沒して居た。今は其中から自己を發見した。人が人の價値意味を發見した。學術も人智を至上と仰いで研究された。其題目も人に適切なもの、即ち實用に供し得べき自然力や、人知によつて測知し得べき自然現象や、並びに自己に最親密な人間の

身心等となつた。斯くして次第に「人」の意味が明となると共に、抽象的普遍的な説明から進んで具體的特殊的となり、何人にも共通な意味を顯す「人」の代りに、各人に特有な性質を示す「我」といふ語が、明白に意識されるやうになつた。實に近世思想の全體、或は殊に近世哲學は此「我」の概念を漸次明白にしやうとすることにある、と言つて宜しい。此「我」に確實な性質を與へやうとすると、次第に客觀的となり、普遍的となるので、其れに對する反動が生ずる。十九世紀後半は即ち此反動が種々の方面から顯れて居るものである。ヘーゲル哲學に對する種々の反抗運動や、自然科學の勃興や、カント哲學の復興によつて主觀的研究に重きを置くことや、抽象的概念の哲學に反對するマーテルリングなどの神秘説や、社會凡俗の平均萬能に對するニーチエの大反抗や、特殊個性の意味を認めて其の描寫を努める文學上の自然主義或は印象主義や、之に關聯して獨り文學上の因襲のみならず、一切の因襲といふやうな抽象的一般性を棄てる自然主義や、其他百般の學術文藝上の新運動は何れも皆歸する處、『我の發見』に關する種々の企てに外ならない。此一般の思潮は到底最感受的な青年――必しも生理上の年齢のみを言ふのではない――に影響を與へない譯には行かない。最近に於ける諸種の現象は一々之を列擧するまでもない。尤も其運動が悉く皆正鵠に中つて居るといふ譯でないことは、西洋に於ける諸運動が必しも皆邪徑に踏み迷はなかつたと言へないと同じ事である。然し、西洋でも日本でも、一部分が正路を踏み迷ふ中、何時か自から其失を覺つて、思想界は他に活路を求めて居る。然し此思潮は一般に昔しの意味の偉人崇拜とは一致しないから、社會の發達よりは維持の方に餘計に注意する老人側からは、屢〻不安の念を以て目ざゝれ、此運動を阻害し得るやうな方法を講じられる。偉人崇拜が此目的の爲に顯れたとすると、其偉人が思

想界と無關係なものから選ばれるのは當然の譯である。

## 五　實際的偉人と思想の偉人

然し、所謂實際界にも二種ある。社會の現狀を人々平等に維持しやうとするのと、多少階級を設けて維持しやうとするのとである。機械の應用が產業の大部分を支配する社會では、工業界に適する道德政策があるべき筈であるのに、此方面に對しても、農業道德を鼓吹しやうとすると、其社會維持の方法が頗る迂遠の觀を呈する。是に於て、其反對に出て階級制を主張する人々の起るのも當然である。其點までは社會維持の側、即ち老人側に於ける意見の衝突であるが、然し、又兩者の合一點が生じて來る。即ち所謂偉人崇拜の階級制は武力專制の時代と一致する。而して、武士が上に立つ時は、機械的產業はまだ發達せずして、寧ろ勞力的產業たる農業が要素となつて居るから、即ち一面に農民の道德を說くと共に、一部分の人々に偉人崇拜を說くことは至當である。斯くして、一面には農業道德に反對して起るやうに見える偉人崇拜も、終に同一思潮に屬して居ることを示し相合して新機運に對立する。

更に又此主張の結果を調べると、之によつて種々の利益も固より澤山あるが、然し、其著しい缺點を擧げれば、人々の反省思慮の精神を萎靡せしめることがあると言へる。非常な力を以て威壓する偉人に對しては批評の餘地がない。我々はたゞ其の言に盲從する許りである。人々が自ら設けた偉人の理想に對しては充分考慮の餘地がある。寧ろ之によつて初めて其理想が出來上るのであらう。然し、他から服從を命ぜられた偉人に對しては、全く考方を異にせねばならない。而して、

此の如き偉人崇拜を外側から說き立てる者の中には、或は又實際かゝる思慮反省の無益有害なことを信じて居る者があるかも知れない。

此の如く偉人崇拜は自我發見、農業的平靜生活、思慮反省等に反對する精神を有するものとすれば、其が既に記したやうな偉人、即ち社會の表面に功名を顯す英雄を懷古的に崇拜することに歸するのは當然である。而して、此の如き偉人の歷史上忘るべからざる功蹟のあつたことは、何時の世になつても變りはない。從つて今日でも之を追懷するのは當然である。然し、此種の偉人が何時の世にも同一の効力があるか否かは疑問である。既に述べたやうに、偉人の觀念は時勢や社會と共に變遷して行くとしたならば、或る社會狀態に於て實際的効果を擧げた偉人は、何時も同樣な効能のあるものと見るのは、大なる時代錯誤と云はねばならぬ。且つ又、更に深い疑問は、多くの人が偉人と目するもの、即ち社會の表面に活動する者が、眞の最上の偉人であるか否かといふことである。活動的英雄の價値も固より大であるが、人々の見方によれば、其英雄に活動の資力を與へる者は、猶一層偉大であるかも知れない。孔子や基督はたとひあれ程の大影響を後世に及ぼさないでも偉人たるに妨げはあるまい。アレキサンドロスとアリストテレスと何れが眞に偉大なるかは隨分疑問としてもよからう。ゲーテとナポレオンとを比べて、ゲーテの方が永久的生命を有つと言つても別に大に怪しむ者はなからう。

然し、假りに過去の實際的英雄を到底及ぶべからざるものとして、崇拜することが今日の時代にも無意味でないとしやう。而も、是が果して既に述べた意味の青年に取つて適當な事業か否かは、形式倫理學の初步から容易に判斷することが出來る。

## 六　現代の青年は現代の理想を追求せよ

余の主意は、偉人崇拜其ものを非難しやうとするのではない。又之を以て青年に不適當な事業だと思ふ譯ではない。假りに偉人を今日多數の人の解釋する通りにして置いても、之に對して尊敬の念を表することは當然だと信じて居る。然し、此事を行ふ精神がもし上述のやうだとすれば、即ち偉人崇拜が手段でなくて目的となつた時に、余は先づ之に對して其唱道の動機如何を穿鑿したくなる。而して、青年の本質と果して矛盾しないか否かを質したくなるのである。偉人の崇拜其事は決して惡事ではなく、まして此間に諸偉人の事蹟などを知得することの出來るのは喜ぶべき事だ。然し、各人は其本質を守らなければならぬ。既に旅に出た者を引返させる譯には行かぬ。現代の青年は現代の理想を崇拜追求するより他に途が無い。

此稿を送つてから『中學世界』正月號を見ると、其中にある偉人の選定法は、普通の思想に異なつた點が多く、本論の一半はやゝ不用となつた觀がある。然し今日多數が一般に認めて居る偉人の概念中には、なほ前記のやうな批評を下す餘地があると思ふ。（完）

## 學生時代に於ける成績不良の天才

先づ第一にニユトンは引力の發明者として、日本の小學生にも知られ、西洋の學者間には文豪としても第一流に位するとまで稱せらるゝ人であるが、飜つて氏の學生時代に於ける成績如何を見る

に、常に最下級に居た。スコットは英國小説家として有名であるが、その學生時代には始終馬鹿大將と云ふ綽名を貰つて居た。

バルザックは豪健不撓の文豪にして、其の生活は色々に變化したが、ウエンドームの中學に居りたる時分には、自分の部屋の壁上に樂書して、壁を眞黑にしたと云ひ傳へられて居る。

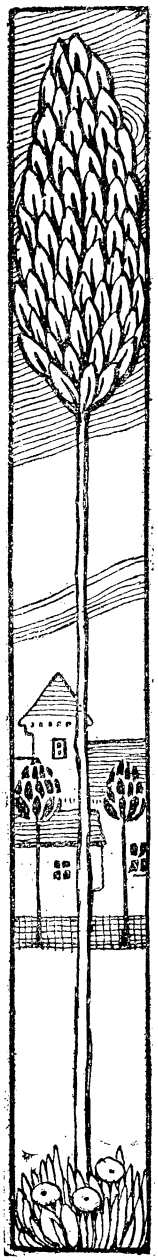
ジユル、ジャニアンはホラシウス（ホレース）の崇拜家として、擬古文士として、又羅甸學者として廣く世に知られた者だが、學生のときには二度學校より放逐を喰つた。

ラマルチヌは詩人として、文士として又史家として、佛國文壇の驍將と稱せられたが、學生としてはウイクトル、ドラプラドの如く極めて平凡なる學生にて、何等の取柄もなく、又勉強の方面より云へば、フランソア、コッペーの如く書物が大嫌で、常に田園の美と人生の快をのみ愛慕したる者である。尙他に惡書生平凡學生の偉人となりたる者の例は十指屈するに遑あらず。特にナマケ者、イタヅラ者と云はれたる學生が、後に軍人となり、武將となりて、英名を天下に輝せたる者の例は歐米に於て數ふるに遑ない程多い。

此種の事象の原因は那邊に存するかは、今遽に定め難く、偶然の運命が、此の變則を來たしたることもあるべく、境遇の變が人を作りたることもあるべく、種々の原因之あるべきが、原因の如何は兎も角、事實は爭ふべからざるものであるから、此の事實を見て奮勵一番すれば、學校に於て成績擧らざるにせよ、試驗に於て落第せるにせよ、それ等は毫も悲むに足らず、異日、必ず名を成す時來らんことを期待し得るであらう。只、古來泰西の偉人が、學校に於てナマケたから、僕もナマケルと云ふやうは眞似をする丈けは大の禁物である。

# 英國の青年斥候團

男爵　牧野伸顯



## 一　實地の心身修養

青年の修養に關しては、既に多數の人々が、繰返し繰返し說明して居る所であるが、現今青年の狀態を觀ると、其の智識の程度も餘程進步して居るし、道德とか、人格修養とか云ふことに就いても、一應の理窟は了解して居るから、今更改めて青年に對し、修養談を試みるにも及ばないであらうと思ふ。併し、なる程現今の青年は、兎に角一應は事物の道理を辨まへて居ると雖も、何分にも社會一般の風潮が、華美安逸に流れて、奢侈の風を助長し、勤勉質實の美風は、全然地を拂ふの觀がないとは云はれぬ。夫れ故、未だ思想の堅實ならざる青年の傾向も、勢ひ社會的風潮に馴致され、驕奢放縱に趣むくことは疑ひを容れぬ。其處で、斯樣なる青年を指導し、訓練して華美虛飾の弊を杜絕し、質實剛健の氣象を養成するには、如何なる方法によれば效果を擧ぐることが出來るか、是れは殊に子弟敎養の任にある敎育家諸氏が大に攻究すべき問題であつて、單に道德談や修養談をなし、或は訓戒するを以て滿足せず、進んで其の方法を案出し、實地に訓練するの途を講ぜねばならないが、又青年諸氏も徒らに理窟を知つたと云ふのでは、何等の益する所ある譯でない故、